

明治期長崎におけるキリスト教(覚え書)

第2部 プロテスタンティズム (1)

坂 井 信 生

A Note on Christianity in Meiji-Period Nagasaki

Part II: Protestantism (1)

Nobuo SAKAI

This is the second part of a three-part paper which considers the activities and achievements of Christian churches in Nagasaki during Meiji-Period. The main focus here is on Protestantism; theological education, Christian schools and other organizations in Nagasaki will be dealt with in the next issue, *Kwassui Bulletin* 48.

Section I of this paper will discuss the missionaries who came to Nagasaki before the abolishment of the edict banning Christianity. They were engaged in activities such as church services for the foreign residents, import and sales of Chinese literature, English education, medical services, Japanese language learning and translation, and missionary work which was covertly undertaken.

It was not until the abolishment of the edict in 1873 that they were back to their primary role of full-fledged missions of Christianity. Section II will mainly discuss establishment of churches by the Anglican Church, Reformed Church and Methodist Church in the central city of Nagasaki and subsequent developments. Also, it will refer to Baptists, Congregationalists, and Seventh Day Adventists. In addition, Russian Orthodox Church will also be dealt with.

はじめに

本稿は「明治期長崎におけるキリスト教」と題して本論文集第46集に掲載した拙論の第2部であり、主としてプロテスタント・サイドの動向を取扱うものである。

すでに前稿でのべたように、1854年徳川幕府は諸外国との間で和親条約を締結して鎖国を解き、外交・交易を再開するとともに外国人に対する居留および信教の自由を認めた。たとえば、58年の「日米修好通商条約」の第8条には「日本に在る亜米利加人自らその宗法を念

じ礼拝堂を居留地に置き障りなし並に其建物を破壊し亜米利加人宗法を自ら念ずるを妨る事なし」云々とある。この条項により、キリスト教は日本伝道への足場を築くことになるのである。

ところで、幕末の日本へのプロテスタント宣教師派遣は、日本伝道の可能性を踏査すべくたまたま長崎で3名のアメリカ人牧師、アメリカン・ボードの中国派遣牧師ウィリアムス (Samuel W. Williams)、アメリカ監督教会牧師サイル (Edward W. Syle)、およびアメリカ海軍付改革派教会牧師ウッド (Henry Wood) が会合をもった。その結果、それぞれ所属教派の外国伝道局に宣教師の日本派遣を要請したことに端を発している^①。この要請に応じて、やがてこれらの教派は宣教師を日本に派遣することになる。もちろん、表面的には条約に規定されているように、居留米国人の宗教生活を援助することであったが、実質的には日本伝道を準備するための派遣であった。

長崎におけるプロテスタントの歴史は、日米修好通商条約が締結された1858年(安政5年)の翌1859年、アメリカ監督教会(Protestant Episcopal Church in the USA)のウィリアムス(Channing M. Williams)とリギンス(John Liggins)、および改革派教会(Reformed Church in America-Dutch)のフルベッキ(Guido H. F. Verbeck)が上陸したことにはじまる。そののちも各教派宣教師の長崎着任は続き、イギリス教会宣教会(Church Missionary Society、以下CMSと略す^②)からは1869年(明治2年)にエンソール(George Ensor)、1870年にバーンサイド(Henderson Burnside)、1875年にモンドレル(Herbert Maundrell)が来崎している。1869年東京に赴任するフルベッキの後任としてはスタウト(Henry Staut)が、さらにはメソジスト派(Methodist Episcopal Church, USA)のデヴィソン(John Devison)が1873年に長崎に到着している。かれらは長崎に宣教師として着任したとはいえ、キリスト教禁制下にあつては、浦上信徒発見の結果ひそかに司牧活動を開始していた多忙なカトリック宣教師とは異なり、宣教師としての本来的な伝道活動を展開するのは不可能であった。

もちろん、これらのプロテスタント宣教師も、のちに「浦上四番崩れ」と呼ばれる浦上信徒の不幸な出来事を知っていた。この出来事についてエンソールは「信徒を大胆な行動へと押し出した〔カトリック教会の〕宣教師のあまりにも無思慮な行動によるという見解がここでは一般的である」とのべ、カトリック教会宣教師への批判を表明している(1869年9月20日付書簡)^③。とはいえ、他方では「私は悪夢から目覚めたようで、同情と悲しみ、絶望と怒りが交錯している」と、流配された信徒に対する深い同情と迫害する日本政府への怒りをもあらわにしている(1870年1月14日付書簡)。このような緊迫した状況の下にあつて、プロテスタント宣教師は性急な伝道活動を実践するというより、むしろ慎重な態度をとらざるを得なかったのである。

I 開国から禁教令撤廃まで

まずはじめに、禁教令下におけるこれらプロテスタント宣教師の動向についてのべよう。たとえば、ウィリアムスが1861年(文久2年)に「現今にては宗教の働きの何等御報告すべきもの無之候」と記し(1861年6月11日付書簡^④)、エンソールは1869年に「日本に到着して3ヶ月を経過したが、私は改宗者の名簿のごとき伝道統計を提出することはできない」という(1869年5月12日付書簡)。さらに、バーンサイドが高札撤廃直後の1873年においてすら、「伝道活動について多くのことを語ることはできない」(1873年7月31日付書簡)と報告しているように、かれらにとっての本来的な直接的伝道活動には従事していない。とはいえ、かれらがまったく無為に時を過していたというわけではない。ウィリアムスは続けて「何等伝道事業の報告可致もの無之と申上げ候はば、日本に於ける宣教師は手を束ねて何の為す所無しとの意味にては無之、準備的の働きは吾等の為に多々有之候。即ち国語の学習、書籍出版の準備、仮令技倆拔群の人たりとも、茲多年の間、精力と時間と技倆とを悉く之に用ふるを要し候。尚又吾等宣教師は前途に横たはれる困難の為に、意気沮喪せる訳にては万々無御座……」という。あるいは「今日まで、此地に於ける宣教師の働きは、宛も地の瓦礫を除き荆棘を拓きて、除草及び播種の備をなすに止り候。即ち基督教に対する人民の偏見及誤解を積くに努め……」(1864年1月日付不明書簡^⑤)と、直接的伝道開始の日に備えての準備、加えて、可能な限りの間接的伝道の方策を試みているのである。その具体的なすがたをいくつかの項目に分って記しておこう。

1. 在留外国人のための牧会

宣教師の任務の第一は、条約に規定されている在留外国人の宗教生活の援助、いわば牧会活動である。ウィリアムスとリギンスは長崎着任直後から自宅(広徳院)において日曜礼拝を主宰するが、かれらの離崎後 CMS 宣教師がその任を継承し、1862年(文久2年)居留地東山手11番に教会堂(宣教師は「イギリス教会」English Churchと呼んでいる)の竣工をみている^⑥。この教会は南山手に建立された大浦天主堂に先立つこと3年、日本最初のプロテスタント教会ともいわれている。まず東山手にプロテスタント教会が出現し、次いで南山手にカトリック教会が建てられ、大浦川をはさんで両居留地の丘に対照的な新旧両教会が建築されていることは興味ある事実である。イギリス教会は圧倒的に多かった英国居留民に支えられ、しかもイギリス政府がその維持費の大半を支弁して発足していることから、CMS 宣教師の専管となった。この教会ののちの動向は詳らかでないが、大正初期に白蟻被害で倒壊したという。したがって、外国人信徒は英国教会の「船員伝道会」(Mission to Seamen)による「船員ホーム」(Seamen's Home)で日曜礼拝を守ったとのことである^⑦。

このイギリス教会に関してひとつのエピソードを記しておこう。『長崎日々新聞』(明治45年5月1日付)によれば、この年4月29日に、かの有名なタイタニック号遭難者のための追

悼式が開かれたという。式は「同号がまさに沈没せんとする時、同船乗組員音楽隊により吹奏せられたる『我御神に近づかん』〔現行『主よみもとに近づかん』〕の悲壮なる讚美歌にはじまり」、イギリス教会牧師ハッチンソンは「乗組船員の勇敢なる行動」をたたえる式辞をのべ、その犠牲となった人々のために祈りをささげた、とのことである。

ところで、バーンサイドの1873年度報告書によると、当時の長崎在留外国人は200名程であるが、日曜礼拝出席者は80名から85名であるという（1873年12月2日付報告書）。バーンサイドの後任としてイギリス教会を担当したモンドレルは次のように語っている。「私は神に従わない長崎在留外国人があらゆる階層の日本人に及ぼしている影響を少なしとはしない。かれらの多くは、たとえば安息日を守り、公礼拝への出席といった外面的なキリスト教の順守すらも示していない。かくて、日本人がキリスト教に無関心となり、神なき文明に満足するとしても驚くことではない。もしイギリス教会の働きが在留外国人の間で効果的に行われるとすれば、われわれのミッションの働きに大いなる助けとなるであろう」と（1880年1月5日付報告書）。このように、イギリス教会を通しての在留外国人の正しいキリスト教的生活が日本人のキリスト教理解に範となり、よき影響をあたえることを期待している。宣教師たちは単に長崎在留外国人への牧会活動にとどまらず、その教会の存在意義を日本人に対する伝道、キリスト教理解という視点から認識している、ということがいえるであろう。

2. 漢籍の輸入・販売

この時期の宣教師の活動に中国からの漢籍の輸入・販売をあげることができる。これら輸入された漢籍は、上海などの宣教師団の印刷所による漢訳聖書をはじめとする宗教書、地理歴史書、物理・医学書など広範な分野をふくみ、長崎での販売はもとより各地に発送もされている。こうした漢籍の需要はかなり高く、宣教師はこの仕事に忙殺された観すらみうけられる。1859年（安政6年）長崎に着任した直後、リギンスは「目下小生の時間は国語学習と書籍売却取扱いに費され居り候。書籍は漢文書にして既に多数売却いたし申候」と、シルナー氏英国歴史、ブリッジマン氏合衆国史、ウエー氏地理提要など11種の書名をあげ、「以上の書籍を今日まで千部以上売却いたし候が、購求者は日本上流社会の人士に候」と記している^⑧。

1860年（万延元年）リギンスは病のゆえに帰米を余儀なくされるが、この漢籍輸入の任務を引継ぐことになるのがフルベッキである。「リギンス師が2月にここを出発しましたので、中国のミッション印刷所の書物の販売と頒布責任を私が負いました。その日から次の書物を売却いたしました」と、ムアヘッドの地理学、ウイリアムソンの植物学、ホブソンの医学書などと共に、宗教史略説、丁良韞の『天道溯原』、『聖教真理概説』などの書名をあげ、「合計496冊、小冊子846部も売却いたしました。宗教書を主とする以上の書籍は現在、大部分、両刀をさした立派な武士階級の手には渡されました」という^⑨。翌1861年には「帝国の到る所で科学書の売れ行きはすばらしいものがある」が、「科学的な書物の販売を中止し、その代

り宗教書だけを紹介するつもり」と方針変更をしてはいるものの、科学・地歴書160冊、宗教に関する小冊子170冊、漢語聖書19冊、漢語新約聖書18冊、英語聖書2冊、英語新約聖書3冊を取扱っている^⑩。

1869年フルベッキが東京に去ったのち、この任はCMSのエンソールに委ねられる。長崎着任3ヶ月後に、かれは漢籍販売に忙殺されており、「今日だけで私は書籍代として13両(gold pieces)を受取った。これらの書籍の中には9巻の大聖書2組、10冊の新約聖書、400の小冊子があり、これらは日本のリバプールといわれる大阪に送られる。私が長崎に着任して以来、およそ1000冊の聖書や小冊子を販売した。これらは各地に散らされており、多くの実を結ぶことであろう。ひとつの小冊子が日本語で準備されており、1、2週のうちに上海で印刷に付される予定である」と報告している(1869年5月12日付書簡)。

こうした宣教師による漢籍とりわけ聖書をふくむ宗教書の輸入販売は、フルベッキの表現を借用すれば、「中国の宣教師の出版した漢籍をして福音をかれら〔日本人〕に伝える方法^⑪として採用されたのである。いわばこれらの漢籍を通してキリスト教理解を求める文書伝道ともいうことができよう。もちろん、購入者は漢籍を読みうる上流階級・武士階級が中心であったが、他方、仏教側のキリスト教理解、とりわけ排耶論展開のために多量の文献が購入されているのもまた事実である^⑫。

3. 英語教育

宣教師の多くは請われて長崎ならではといえる各種教育機関あるいは私塾において、英語教師の役割を担っている。日本の英語史上におけるかれらの貢献については、すでに多岐にわたり高い評価があたえられている所でもある^⑬。たとえば、リギンスの長崎滞在はわずか10ヶ月にすぎないが、前述のごとく多量の漢籍輸入・販売に加えて、幕府の通辞に英語を教授し、さらに英和対訳会話書である *Familiar Phrases in English and Romanized Japanese* という著書を1860年に上海で出版している^⑭。

フルベッキの貢献も大なるものがある。かれがオランダ出身という好条件もあって、1863年から長崎奉行所管轄の英語伝習所の後身済美館(のちの広運館)に教師として招聘され、英語のみならず「算術・数学および有用な科学の概要」の教授に当たっている^⑮。かれの済美館時代については次のごとき記録が文部省刊『日本教育史要』(1877年)に見出される。「済美館モ亦長崎ニアリ文久三年1863建ツル所ニシテ外国語学校タリ清蘭及英仏魯五国ノ言語ヲ学ハシメ各其学人ヲ以テ教授トス学科教法皆其国風ニ遵フ後又算数学ヲ加フ時ニ米利堅ノ教師能ク吾国ノ言語ヲ解シ教導最其法ニ適フヲ以テ生徒来リテ従学スル者極メテ多シト云フ」と^⑯。この「米利堅ノ教師」とはいうまでもなくフルベッキその人のことである。かれ自身も「この学校は別に変わったことなく経営されております。生徒の学力もかなり進んでいます。当局者もわたしの教授ぶりに満足しているようです」という^⑰。ちなみに、プチジャン

が、新たに設けられた外国語学校のフランス語担当を依頼され、キリスト教に好ましい影響のあることを考慮して承諾したことが伝えられているが^⑧、おそらくこの済美館のことと思われる。

さらに、1866年（慶応2年）佐賀藩が藩士教育を目的に長崎に致遠館を創設するや、フルベッキはこの致遠館にも招かれ、済美館と交互に出校して英学のほか政治・天文・兵事などの諸学を講じている。かれの致遠館における生徒の中には大隈重信、副島種臣など、のちに明治維新政府の中軸となる逸材がふくまれており、かれらはフルベッキの助力をうるために1869年開成所（大学南校）教師として東京に招聘することになるのである^⑨。またかれは諸藩からの要請に応じて米人教師の斡旋をも行っている。やがて「奉教趣意書」に署名をし、「熊本バンド」と称される一群の青年を指導した熊本洋学校のジェーンズ（Leroy L. Janes）もそのひとりである^⑩。

CMS 宣教師はむしろ個人的に英語教育を試みている。私塾といってもよい。エンソールは「今、英語を教えている。肥前・肥後・豊前・豊後・筑前その他各地からの学習者で私の手は一杯だ」とその盛況ぶりを伝えている（1869年9月20日付書簡）。パーンサイドも着任後直ちにバイブル・クラスを開始している（1872年12月2日付報告書）。かれらは英語聖書をテキストに用いてはいるものの、これら英語学習者の中から、のちにキリスト教徒として指導的地位に立つ人物はほとんど輩出していない。かれらは藩命をおびて英学・洋学を学ぶ目的で長崎に来ているのであり、禁制下にあるキリスト教にはまったく興味を示さなかったからであろう。英学希望者からキリスト教徒が誕生するのはキリスト教禁制撤廃後のことである。

4. 医療活動

宣教師の活動のひとつに医療事業が数えられる。布教地に診療所を開設、慈善的医療活動を通してキリスト教に対する反感を除去し、理解と親近感をうるという伝道方策はしばしば各地で採用されている。古くはキリシタン時代豊後大分におけるアルメイダの府内病院^⑪、幕末期では横浜における1863年開設のヘボン診療所^⑫はよく知られている所である。

長崎における医療活動はヘボン診療所と比較してほとんど知られていないが、アメリカ監督教会派遣の宣教医シュミッド（H. Ernest Schmid）の働きがある。ウィリアムスはかれの活動について次のように報告している。「既に多くの難病者を扱ひて着々其効を奏し、従つて熟練の令名を博し居られ候。同博士が治療の効と病者に対する親切とは多くの患者を引寄せ、遠方より来りて氏の診断を請う者多く、患者の数は駈々として増加致候には、久からずして同博士一人の手にては、便じ能はざるに至るべしと存候」と（年月日不明書簡）^⑬。さらにシュミッドは診療活動のみでなく、医学教育をも試みている。かれ自身「小生は今若干の医学生を得て、英語を教授いたし初め候。此教授は是より数ヶ月間続くる積に候。小生の目

的は、日本語に訳し能はざる医学上の術語を彼等に了解せしめ、以て将来誤解の虞なく、彼等を使用せん為に候。小生は又和英対照の医学字彙を編纂致居候」とものべている(1861年1月日付不明書簡)^④。

しかし、シュミッドは健康を害して長崎滞在1年数ヶ月で帰米を余儀なくされた。かれの和英医学辞典も、もちろん出版されていない。ウィリアムスはかれの働きが多く日本人の高い評価と賞賛を獲得しており、そのことが宣教師に対する偏見と伝道上の障害の多くを取除き、宣教活動に大きな援助になったであろうと、かれのあまりにも早い帰国を慨嘆しているほどである(年月日付不明書簡)^⑤。

5. 日本語学習と翻訳

上にのべてきた諸活動と並行して、宣教師は日本語学習にかなりの時間を割いている。パリ外国宣教会宣教師が琉球で数年間日本語学習を経験したような、時間的余裕をもたずに来日したプロテスタント宣教師にとっては当然のことであった。キリスト教禁制が解かれ、公然たる伝道活動が可能となる日に備えるとともに聖書あるいは小冊子の翻訳を進めた。漢籍が読めない一般の日本人にもひろく福音を伝えたいとの願いからである。

ウィリアムスは書簡で次のように記している。「申迄もなく拙者は日本語学習の為に殆ど全く時間を費し居候。此国語は甚だ六ヶ敷して加ふるに辞書も文法書も無之、又教師は甚だ無頓着なれば、小生の日本語の進歩は遅々たらざるを得ず候。先ず翻訳の初めとして、拙者は主祷文、信経、十戒を訳し、之を一冊の書籍と致申候」と(1862年1月10日付書簡)。あるいは、これまで漢籍を頒布してきたが、漢文を読めない大多数の日本人のために文書伝道をすべき時が来たと考え、出版を「計画いたし候へ共、当地の印刷者中果して之を引受くるものあるや否や確かならず候」と、翻訳しても出版の可能性に危惧の念を表明している(1864年1月日付不明書簡)^⑥。

かれらの日本語学習に資したのは、「甚だ無頓着な教師」もさることながら、先述のリギンスによる *Familiar Phrases* であろう。フルベッキは本書について「リギンス氏は長崎でのわずか10ヶ月の短い旅行の間に有益な小冊子を著し出版した。これは中国にあった類書の翻訳であった」という^⑦。在日宣教師の著作の中で最も重要な文献といわれるヘボンの『和英語林集成』(*Japanese-English and English-Japanese Dictionary*, 1867)に先んずること7年の先駆的出版物である。

CMSのエンソールもまた翻訳・出版に心をくわいており、長崎着任の年(1869年)早くも「教育のない人々のためにひとつのトラクトが日本語で準備され、1、2週間のうちに上海で印刷に付される予定である」ことを伝えている(1869年5月12日付書簡)。さらに、翌年の書簡は次のようにいう。「昨年末私は聖マタイ福音書の翻訳に従事したが、ついに完成した。ついで聖マルコ福音書の翻訳を手がけている。私は私の仕事に満足しているが、少な

くとも将来の修正・改訂の基礎として役立つだろう。横浜では和英辞典のすぐれた著者ヘボン博士によって〔聖書翻訳事業が〕進められており、すでに福音書の翻訳を終えていると思われる。博士は親切にも私に翻訳に関する情報交換を申出てくれた」と（1870年9月13日付書簡）。しかしながら、今日、この書簡にあるエンソール訳と伝えられるマタイおよびマルコ福音書は存在していない。

6. 伝道活動

以上概観したように、幕末から明治初年にかけて長崎に着任したプロテスタント各教派宣教師の活動は、カトリック教会宣教師のそれとは大きく異なり、ある意味では間接的伝道とでもいう性格のものであり、きわ立った成果をそこにみることはほとんど不可能である。キリスト教禁制下にあり、居留地を離れての外出は「外国人遊歩規定」により極端な制限が加えられ、つねに官憲・密偵の監視のもとにおかれていた事情からすれば、やむを得ないことであったであろう。「彼等日本官憲は特に疑心深く、宗教のためになさるる、あるいは宣伝者によりてなさるる事柄に対して、特に疑心を以て臨む次第にして、之れ特に注意すべき事に御座候。只今のところは公然宗教の事業に従事するを許さるべき見込みは差当たり御座なく候」とウィリアムスはこのべる（1861年月日不明書簡）⁸⁾。

宣教師に積極的な接触を求めてくる人々は、その大部分が他藩から英学・洋学を目的に長崎に来ている者、あるいはキリスト教探索を目的とする仏僧であり⁹⁾、長崎の人はほとんどみられない。「日本人が喜んで聴こうとする事實は、ともかくわれわれを勇気づける。かれらが英語や科学の習得に強い情熱を示しているからだ」（1869年2月4日付書簡）、「私は最初からあらゆる階級の人々、医師・武士・僧侶に待たれていた。しかし、これらの人々は長崎の人ではなく、肥後・肥前・長州その他日本のあらゆる所から来ている人であり、中には学者として著名な人、武勲をたてた人、大名の家臣、教師もふくまれている」（1869年5月12日付書簡）とエンソールは記している。

とはいえ、このような制約のもとにあつての宣教師の伝道成果がまったくなかったわけではない。わずかであるとはいえ、若干の者に洗礼を授けているからである。

長崎においてプロテスタント宣教師から最初に受洗したのは、佐賀藩家老村田若狭、その弟綾部三左衛門、家臣の水野修三の3名である。授洗者はフルベッキ、1866年（慶応2年）5月20日のことである。かれらの受洗にいたる経緯は、*Manual of the Mission of the Reformed (Dutch) Church in America* 記載のフルベッキ書簡に詳細にのべられている¹⁰⁾。ちなみに、日本における最初のプロテスタント受洗者は、横浜在住宣教師バラ（James H. Ballagh）およびブラウン（Samuel R. Brown）の日本語教師であった矢野元隆であり、1864年（元治元年）バラより受洗した¹¹⁾。さらに、フルベッキは、1868年かれの日本語教師で肥後出身の若き真宗僧清水宮内にも洗礼を授けている。フルベッキ離崎後エンソールの雇人となった清水は1870

年逮捕、エンソールがその釈放のために公私にわたり尽力するが果せなかったことが、かれの書簡にみえる。「私のパンを食し、私の杯からブドー酒を飲み、私にとって兄弟でもあり、非難されるべき所もなく平和な生活を送っていたひとりのキリスト教徒が夜半下宿で捕えられた。私的公的な最大の影響力が行使されたが、その釈放に何らの効も奏さなかった」と(1870年1月14日付報告書)。

『長崎聖公会略史』によれば、エンソールは1872年まで、つまりキリスト教禁制下において、10名の者に洗礼を授けている。その中には、かれの日本語教師であった筑前糸島の真宗西光寺の二川一騰(教名ルカ)、あるいは仁村守三(広島の実宗僧で邪宗探索に従事、のちに横浜基督公会創立時に執事のひとりに推挙される)の名がある⁹⁾。しかしながら、この時期に受洗のこれらの人々はほとんど他藩出身であり、同じ時期にカトリック大浦教会で受洗した1500人以上の地元浦上信徒とは大きな対照を示している。

II. 禁教令撤廃以降

前稿においてものべたように、1873年(明治6年)は日本近代宗教史、ことに日本キリスト教史上きわめて重要な年といわなければならない。この年の2月17日待望のキリシタン禁制の高札が撤廃され、ともかくもキリスト教信仰が容認されたからである。長崎在住の宣教師は、カトリック・プロテスタントを問わず、かれら本来の伝道活動を公然と開始することになる。この年に長崎に居住していたプロテスタント宣教師は、CMSのバーンサイド、改革派教会のスタウトであり、メソジスト監督教会のデヴィソンはこの年の8月着任した。かれらは高札撤廃後の長崎で、それぞれ時には競い合い、時には協力しながら積極的な伝道活動に入るのである。

ところで、かれらはこの数年前より禁制撤廃の日が近いことを感じはじめていた。1870年にエンソールの後任として長崎に着任したバーンサイドは、この朗報が近く公布されるであろうと1872年12月に報告している(1872年12月2日付報告書)。すなわち、第一に浦上信徒の送還がこの夏より開始されたこと、第二に2ヶ月程前美装の英語聖書がヘボン博士を通して天皇に献上されたこと、がその主たる理由である。また一部の日本人の間にもこの空気が存していると、続けて次のようにのべる。「私がこの地に上陸した22ヶ月前には、求道者は夜陰にまぎれて私を訪ねてきていたが、現今では日中のあらゆる時間に訪ねて来て、キリストの宗教について尋ねない日はない」ために、「キリスト教信仰が許される日は遠くない」との状況判断から、かれは半ば公然とバイブル・クラスを開始する。「週に1度、日曜の午後に開いており、平均出席者12名であり、すでにこの中には熱心に受洗を希望している者もいる」という。

そして、禁教令撤廃の直後には、「今日では以前と異なりほとんど恐れる様子はみられず、かなりの人が私を訪ねてくる。日曜には〔イギリス教会に〕20名程の日本人がくる。その多

くは僧侶であり、英語の礼拝に出席する。奇妙なことだが、かれらは英語を理解できない。数ヶ月前にはみられない光景である」と、その大きな変化を「注目すべき希望にみちた光景」と書き記している（1873年2月22日付書簡）。このバーンサイド書簡は、ひとりかれのみでなく、おそらくすべての宣教師がいかにかこの日を待望し続け、この日に大きな希望をあたえられたかを物語るものと解することが許されるであろう。

かくして、かれらは宣教師としての本来的かつ直接的な伝道活動を開始することになるのである。かれらの主たる活動は次の諸点にまとめることができよう。(1)説教所そして教会の設立、(2)キリスト教主義学校の創設、(3)日本人伝道者育成のための神学教育、そして(4)長崎を本拠 (station) に日本人伝道者を指導しての九州の主要都市への伝道、である。ただし、本稿においては紙幅制限のゆえに、(1)説教所・教会の設立のみを記し、(2)キリスト教主義学校の創設以下は次号に掲載することにしたい。

1. 説教所・教会の開設

(1) 聖公会教会^⑧

自宅でバイブル・クラスを開始し10名をこす出席者を得たこと、また居留地内のイギリス教会への日本人出席者の増加をみたこと、これらの事実から禁教令撤廃後間もなく、バーンサイドは市中に説教所を開設すべく借家を求める。しかし誰ひとりとしてそれに応じる者はなかった。政府の対応をおそれるからでなく、むしろキリスト教のために家屋を貸せば、近隣の人びとが襲撃して破壊されるのを危惧したからだという。長崎市民の反キリスト教感情の一端をうかがわせる。そこで、バーンサイドは市中に家屋を得て礼拝が可能になるまで、イギリス教会で日本人対象の礼拝を主宰したい旨英国領事に申入れるが実現せず、東山手居留地内の自宅で礼拝を開始することを決意する。1873年11月のことである。

午前中にイギリス教会礼拝を司さどり、午後従来のバイブル・クラスを礼拝に変更したのである。最初の礼拝には10名、2回目は11名、そして3回目には22名に増加したという（1873年12月3日付報告書）。この自宅での日本人対象の礼拝も当初は出席者の増加がみられたものの、回を重ね物珍らしさが終るにつれて急速に減少していった。かれはその理由に、市民に宗教に対する無関心さが蔓延していること、居留地の自宅が市街地から離れすぎていることをあげている。これを克服するためかれは出島と市街地との境界に土地入手を計り、在留英国人に援助を要請した。「この土地は容易に入手できそうだし、人通りもあり、会堂や学校を建てるのに最適の場所である」と（1874年2月22日付書簡）。

かくして、出島8、9番地に新会堂が竣工したのは1875年（明治8年）で、7月11日盛大な献堂式が挙げられた。この時バーンサイドは病を得て帰国を余儀なくされており、大阪のCMS宣教師エヴィントン（Henry Evington）が代わって工事を監督し、献堂式も司さどった。バーンサイドの後任で神学校設立など大きな貢献をするモンドレル（Herbert Maundrell）の

着任は献堂式の直前であった。かれは出島の新会堂を評して、「それは美しく、バーンサイドの趣味とデザインをよく示している。会堂は市街地ではないが町に近く、日本人街とヨーロッパ人居留地のかけ橋であり、日本人が容易に訪ねうるものだ」という(1875年7月11日日記)。

日本人が容易に来訪しうる場所に会堂が建てられたのを契機に、モンドレルは積極的な伝道活動を開始する。東京でロシア正教会宣教師ニコライを通してキリスト教に改宗した水科五郎の助力をえて、かれは毎日曜朝と夕に礼拝をもち、20名から50名の出席者のあることを、この年の末に報告している(1875年12月13日付報告書)。翌年度の報告では、12名の受洗者があったこと、教会の経済的自立がほどなく可能となったこと、そして、いずれも武士階級に属し、佐賀と熊本の出身である4名の若者が同胞のために伝道者を志願していることなどを記している(1876年12月4日付報告書)。今日の聖公会長崎聖三一教会発足当初のすがたである。

モンドレルは長崎着任から1890年(明治23年)まで、一時帰英もあるとはいえ、15年の長きにわたり長崎での伝道活動に携わった。その間かれは出島教会のみならず、新大工町にも説教所を設け、また聖アンデレ神学校を設立し神学教育にも従事し多くの日本人伝道者を育成している。このことは次稿でのべよう。1881年(明治14年)来崎のハッチンソン(Author B. Hutchinson)は、ステーションである長崎はもとより九州の各地に伝道の足跡を残しているのである^⑧。

のちに聖公会と呼ばれるようになるこの長崎監督教会は、後述の長崎一致教会あるいは他のプロテスタント教会と合同でしばしば基督教演説会を開催している。その最初の試みは一致教会との合同で、1882年(明治15年)5月榎津町芝居小屋で開かれた。これは長崎における最初の合同基督教演説会といってもよいと思われる。ちなみに、この演説会の演者のうちモンドレル、デニング、木庭孫彦は監督教会、スタウト、服部章蔵、瀬川浅は一致教会の面々である^⑨。

1875年出島に建てられた教会は、1890年(明治23年)大村町に新築移転した。この頃は長崎監督教会と呼ばれていたようであるが、現在の名称である長崎聖三一教会と改められたのは、1895年の信徒総会の決議によるという。日本聖公会成立がその契機である^⑩。

ともあれ、長崎における聖公会教会は、エンソール、バーンサイド、モンドレル、ハッチンソンと続くCMS宣教師により基礎が築かれ、日本人伝道者養成が試みられ、さらにはかれら宣教師指導のもとに九州の主要諸都市への伝道が進められるなど、まさに明治期の九州伝道のステーションと呼ばれるにふさわしい地位にあった。しかしながら、ハッチンソンが「かつて城下町であり、現在は九州の軍事的教育的中心地」である熊本が「われわれの宗教の本部(headquarter)として確保される必要があり、このことはますます明らかとなってきた」(1887年2月22日付書簡)というように、明治中期から後期にかけての九州における長

崎の地位の相対的低下に対して、熊本の重要性が認識されはじめる。日本聖公会の成立にもない組織上の整備が行われ、「東京・大阪・熊本・函館をもって各地方会の中央となす」との規定により、長崎に代わって熊本が九州地方中央となった。このため、九州で個別に活動していた CMS 宣教師および各教会は全国組織に組込まれることとなり、従来長崎が果たしてきた地位と役割の大部分は熊本の地方中央に移行されることになるのである^⑧。

(2) 改革派教会（一致教会）

1859年（安政6年）米国オランダ改革派教会から派遣されて長崎に上陸したフルベッキは、長崎奉行直轄の英語伝習所の後身済美館（のちの広運館）また佐賀藩の致遠館の教師として、やがて明治維新政府の中核となる人物を養成し、かつ宣教師としてキリスト教禁制下にもかかわらず数名の者に洗礼を授けるなど、すでにのべたように、大きな貢献を残して1869年（明治2年）開成所（大学南校）教師として招かれ、長崎をあとに東京に去った。その後任として派遣されたのが、この年長崎に着任したスタウト（Henry Staut）である。スタウトは着任直後フルベッキの後を継いで広運館教師を勤めるが、禁制下にもかかわらず自宅に生徒を寄宿させてキリスト教を伝える試みを行っている。やがて禁教令撤廃の近いことを知り、1872年（明治5年）広運館を辞し、東山手居留地の自宅に広運館時代の生徒を対象に聖書を主たる教科書に夜間の英語学習塾を開設した。スタウト夫人エリザベス（Elizabeth G. Staut）もこの年自宅で女子塾を開き、英語・裁縫・編物を教えた。翌年かれらの友人である熊本洋学校教師ジェーンズ（Leroy L. Janes）の献金で自宅の一隅に小さな校舎をうることになるこの塾は^⑨、やがてスチール・アカデミー（のちの東山学院）およびスタージェス・セミナー（のちの梅香崎女学校）に発展し、長崎の主要なキリスト教主義学校に数えられるのである。

ほどなく、スタウトの塾生のうち小倉県中津の瀬川浅、山口県山口の山田陽蔵、三潞県柳川の隅田藤の3名の青年が受洗することになる。まさにスタウトの初穂であり、禁教令撤廃直後の1873年（明治6年）9月のことである^⑩。スタウトは将来の教会の中核となるこれら3名を得るにおよび、この年自宅の一隅にある塾舎を用いて礼拝をはじめた。同時に瀬川と山田に対して聖書と神学の教育を開始した。かれらとともに伝道活動が可能となるためである。翌年には瀬川はスタウトとともに説教を担当できる程に成長している^⑪。しかし、居留地内の小さな塾舎を用いての市民対象の伝道はいたって困難であることから、スタウトは市街地と隣接する居留地の最も端の梅ヶ崎に土地を得て、1874年夏に約24坪の木造会堂を建築した。建物がほとんど完成間近かになったところに不運にも台風が襲いこの会堂も倒壊したが、再建されこの年12月に最初の礼拝が守られた。この教会は町の名にちなみ「梅ヶ崎教会」と呼ばれた^⑫。

比較的有利な場所に位置したこの新会堂を用いてスタウトと瀬川は積極的に伝道活動を開始した。レーマンは「恐らくこれが長崎で公に伝道された最初であるということができし」「すぐに多くの会衆が集った」とのべている^⑬。この盛況ぶりについて、大阪在住の CMS

宣教師エヴィントンは次のように報告している。「長崎の内外から多くの人が集まり、わたしも2、3度夕礼拝に出席したが、80人から150人の会衆があり、中には僧侶も出席していた」と、CMS 説教所と比較してその盛況ぶりに驚き、その理由を説教所の立地案件にみている(1875年7月日付不明大阪発書簡)。このことがCMS 説教所の出島への移転を大きく促すことにもなるのである。

こうした活況をみたスタウトはさらに新しい試みを行う。すなわち、瀬川名義で市の中心部に近い酒屋町に家屋を得て第2の説教所を開設したのである。この間の事情を当の瀬川は次のように述懐している。「既に居留地内に一致会堂を得て説教を継続する事となりたれ共、市中に充分伝道するの不便あれば、明治9年の春市の殆ど中央なる酒屋町川端近くに、私の名義を以て一家を購ひ、説教所兼新聞縦覧所を設け、聖日には必ず定規の礼拝を此家に施行する事となった」と⁴³。瀬川の文中にある新聞縦覧所については、『西海新聞』(明治9年6月15日付)に、「酒屋町に住める瀬川といふ人の宅にて昨今新聞縦覧所を開き日本の新聞は勿論西洋支那の諸新聞を集めて見料もなしに見せると申すこと。又日曜日には朝夕再度説教が始まると、聞いてきた人のはなし」とあり、7月25日にはその広告が掲載されている。

1876年(明治9年)12月25日この酒屋町説教所において、10名の成人会員と2名の幼児により「長崎日本基督公会」が組織され、瀬川が仮牧師に任じられた⁴⁴。この長崎公会は長崎はもとより九州で最初に組織されたプロテスタント教会であり、今日の日本基督教団長崎教会の前身にほかならない。この教会設立礼拝で受洗したひとりに瀬川と同郷の留川一路がいる。かれもまた瀬川とともにスタウトから神学を学び、二ヶ所の説教所で伝道活動に従事することになる。1879年「伝道上の都合によりして酒屋町説教所を廃し、爾来は梅ヶ崎教会を以て本教会として活動する」ことを決した⁴⁵。なお、この前年瀬川・留川とともに「スタウト三羽鳥」といわれ、のちに長崎教会を牧することになる平山武知が受洗している。

ところで、1877年長老派教会と基督公会が合同して日本基督一致教会(のちに日本基督教会と改称)を形成することにより、長崎公会も一致教会の一翼となる⁴⁶。これと同時に在京各宣教師の私塾が合併して東京一致神学校が設立されたため、長崎の瀬川はこれに入学してさらなる研鑽をつむのである。1881年(明治14年)一致教会においては所属教会を地方別に三分して三中会を設け中国および九州の諸教会は西部中会(1885年に鎮西中会と改称)に属することとなった。スタウトが駐在する長崎教会はこの中会における中心的地位にあった。1878年横浜でアメリカ改革派教会日本伝道会社が組織されたが、長崎での活動は伝道会社の長崎ステーションと呼ばれていた事情からである⁴⁷。長崎ステーションからは、神学校を卒業した瀬川が鹿児島に、同じく神学校終了の留川が佐賀に赴任するなど、唐津、小倉、熊本といった九州の諸都市、大村、佐世保、島原などの長崎県下への伝道が試みられた。

1886年(明治19年)以降の『日本基督教会鎮西中会記録』⁴⁸には、中会所属各教会の近況報告が記載されている。この中から長崎教会のすがたを若干取出してみよう。「当会一般ノ景

状ハ之ヲ前年ニ比スルニ大ニ面目ヲ改メ教会モ平和説教ノ時ハ聴衆ノ数増加シ皆謹聴ス教会集金ノ額ヲ云ハハ其増加前回ノ頃ト違ヒ又入会者夥多アリ」(明治19年第10次年会)、「当港監獄内ニ伝道ヲ始メタルヲ以テ其官吏ニ道ヲ伝フルヲ得近来会堂外市中ニーノ講義所ヲ設ケタリ」(明治22年第15次年会)、「市中ニヶ所ノ講義所ニハ何レモ聴衆二三十人宛アリ」(明治23年第17次年会)、さらには「昨年度中教会平和ニシテ数名ノ者受洗セリ其多数ハ造船所ノ者ナリ」(明治35年第36回記録)のごときもみられる。

ともあれ、長崎教会は1896年(明治29年)に財政的にも独立して、たとえば、かつて長崎に在住した宣教師フルベッキの来崎を機に、あるいは日本基督教会伝道局長で著名な指導者植村正久を招いたり、独自の講師による説教会を開催するなどの伝道活動を継続している。明治末の1910年(明治43年)には現注册会员219名、日曜礼拝出席者平均95名、祈祷会出席者平均45名と、長崎におけるプロテスタント教会最大の教会であるのみならず、日本基督教会における大教会のひとつにも数えられている⁹⁾。

(3) メソジスト教会⁹⁾

メソジスト派による長崎派遣宣教師は、禁教令撤廃後の1873年(明治6年)8月着任のデヴィソンである。この前年ニューヨークで開催されたアメリカ・メソジスト監督教会年会において日本伝道開始が決議、4名の日本派遣宣教師が任命された。日本における伝道地として東京・横浜・函館そして長崎が選定され、長崎はデヴィソンが担当することになったのである。かれは出島に居を定め、日本語学習に時間と精魂をかたむけた。バーンサイドとスタウトはすでに長崎で数年を経ており、おそらくかれらの紹介と推定されるが、石見出身の禅僧がデヴィソンの日本語教師となった。かれの最初の受洗者となった飛鳥賢次郎がそれである。飛鳥はのちに伝道師・牧師としてデヴィソンなど宣教師の片腕となり、九州伝道に活躍し、とくに鹿児島・熊本での教会創設に尽力することになる。

1875年デヴィソンは出島に洋風建築による教会堂を建設、この教会は「出島美以教会」と呼ばれることになる。CMSのモンドレルは「デヴィソンが出島に教会を建てた。この教会はわれわれの教会より数百ヤード市街に近く、クリスマスの後に公開説教をはじめるといふ」と記し(1875年12月13日付報告書)、出島に教会を建てた理由として「外国人が市中に建物を建てるのが許されないからだ」とのべている(1876年2月21日付書簡)⁹⁾。このデヴィソンによる出島教会が、曲折を経てやがて日本基督教団銀屋町教会に成長するのである。また、デヴィソンは伝道方策上長崎にキリスト教主義学校設立の必要性を痛感し、教育専門の宣教師派遣を本国の伝道局に要請する。その成果が今日の活水学院および鎮西学院にほかならない。長崎におけるメソジスト教会の発展は両校との関係が密接にかかわっているが、このことについては次稿でのべよう。いずれにしろ、デヴィソンさらにロング(Carroll S. Long)などの宣教師の働きとともに、これらの学校の教職員および生徒の出席もあり、さほど広くもない出島教会は手狭に感じられる有様であったという。

1884年(明治17年)にメソジスト監督教会系の日本美以美教会第1回年会在東京で開催され、日本における伝道の組織化が計られた。この年会記録には長崎連回地長老としてロング、出島教会担当者として木村七十郎の名をみることができる。翌年の第2回年会記録によれば、木村は久留米に移り菊池卓平が着任、出島教会は「試中ノ者10名、会友(会員)126名、定住伝道者1名、受洗者小児31名・大人21名……牧師ノタメノ謝金15円63銭」と具体的に教勢が記され、出島教会の盛況ぶりをうかがわせる。さらに、1890年の第7回年会記録によると「長崎宮島〔出島カ〕教会の牧師の配下に在る市中の新講義所は本年の初期ジョンソン氏の創立に掛るものにして其処には説教及安息日学課の稽古等ありて随分有益の働きなり又同家は分校を設け鎮西学館の教師等各自交代して教授をなせり」とある。

鎮西学館教師ジョンソンによる新講義所すなわち市の中心部に近い浜町講義所が、次第に市民対象の教会という性格を強め、1891年出島教会から独立し、やがて牧師砂本貞吉主導のもとに麴屋町に移転、麴屋町メソジスト教会と称した。さらに、中山忠恕の牧師在任中の1904年(明治37年)出島教会の土地売却により銀屋町の現在地に出島教会堂を移築、同時に自給独立の教会となり、名称も長崎メソジスト中央教会と改めた。これが今日の長崎銀屋町教会に発展するのである。他方、活水女学校・鎮西学館に係る教職員・生徒を主体とする分離後の出島教会は、東山手の鎮西学館構内に移転し、ウエスレー教会の名称のもと、主として活水・鎮西両校のキリスト教教育を担う学校教会としての機能を果たすことになるのである。しかし、のちに鎮西学館の焼失と竹の久保への移転にともない、ウエスレー教会は東山手教会と城山教会とに分離せざるをえなくなり、解消の命運をたどった(1930年・昭和5年)。なお、第2次世界大戦中に文部当局の強い圧力により、これらの学校教会は存続がいたって困難な状況となり、信徒たちはメソジスト系の銀屋町教会などの市中の教会に所属することを余儀なくされた。

日本におけるメソジスト系の教会は、デヴィソン等を派遣したアメリカ・メソジスト監督(美以美)教会のほか、南部メソジスト監督(南美以)教会およびカナダ・メソジスト教会などであるが、これらメソジスト3派はアメリカに先んじて1907年(明治40年)に合同、日本メソジスト教会を組織した。当然、長崎のメソジスト諸教会もこれに加盟、これを機に中央教会は日本メソジスト長崎中央教会と改めた。中央教会は長崎飽の浦に講義所を開設、今日の長崎飽の浦教会の基礎を築いている。1909年(明治42年)の記録によれば、中央教会112名、ウエスレー教会210名の教会員を擁している^⑧。

(4) その他のプロテスタント教会

明治期に長崎で伝道を始めたプロテスタント諸教派は、上記3教会のほかに浸礼教会(バプテスト教会)、組合教会そしてセブンスデー・アドベンチスト教会がある。以下、簡単にこれら諸教会の動向を記しておこう。

(i) 浸礼教会^⑧

バプテスト派の長崎伝道は1896年（明治29年）に開始された。九州を伝道区域とするアメリカ南部バプテスト教会は、北九州・福岡に教会を設立し、ついで熊本・鹿児島・長崎に伝道戦線を拡大した。ウワーン（E. N. Wahne）と菅野半次が長崎に着任、門司浸礼教会長崎講義所として本格的伝道に従事し、1902年（明治35年）桜町に長崎浸礼教会の組織をみた。今日の日本バプテスト連盟長崎教会のスタートである。この年南部バプテスト教会日曜学校委員会より、日本における文書伝道のための基金がウワーンのもとに送られてきたことから、かれは「福音書店」なる書店を会堂階下に設け、キリスト教図書の取次販売を行うことになった。福音書店はウワーンの離崎後ロウ（G. H. Rowe）に引継がれたが、1912年（明治45年）長崎から福岡に移転した。これは南部バプテストの日本における最初の文書伝道・出版事業であり、今日の日本バプテスト連盟出版部であるヨルダン社の前身ともいうことができよう。

1903年は南部バプテストによる九州伝道開始10周年に当り、これを機に「日本浸礼教会西部部会」が組織され、九州各県と山口県から長崎浸礼教会をふくむ7教会3講義所が参加した。この西部部会が中心となって、戦後の1947年（昭和22年）に成立した「日本バプテスト連盟」に発展することになる。西部部会成立後、部会最初の機関紙である『星光』が千葉勇五郎を編集発行人として発刊されるが、発行所は長崎の福音書店であった。しかし、1907年（明治40年）福岡神学校開設のため、千葉とウワーンは福岡に転ずることとなり、『星光』の編集と発行も福岡に移った。

長崎浸礼教会が組織されて10年後の1905年初頭の礼拝出席者は男性11名、女性12名との記録が残されている。長崎ではさらに、油屋町に荒瀬鶴喜を主任者に講義所を開設するが、荒瀬の鹿児島転任のために閉鎖されている。明治末の教会員は35名を数え、この教会が大きく成長するのは大正期に入り尾崎源六を牧師に迎えてからのことである。

(ii) 組合教会^⑨

長崎における組合教会の創設は、すでに他所の組合教会でキリスト教信仰を得、その後長崎に転住してきた14家族19名の信徒が、1901年（明治34年）一信徒梅田信五郎宅に集まり、長崎に組合教会設立の議をなしたことはじまっている。牧師派遣に関するかれらの願い出を受けて、当時の日本組合基督伝道会社は剣持省吾を派遣した。かれは直ちに長崎在住信徒とともに積極的な活動を開始し、翌年には新大工町にて長崎組合教会の設立式が挙行される運びとなった。この時の会員数は23名であった。現在の日本基督教団長崎馬町教会の発足である。

1904年剣持の京城転出後、若き牧師山本忠実が着任した。教会も勝山町に移り、剣持時代から精力的に行われていた学生伝道を継承し、長崎医専、長崎高商の学生に対する伝道に力をそそぎ、かれらを対象とした聖書研究会など特別集会を開いている。東京本郷教会牧師海老名弾正を招いての特別演説会には250名の聴衆があり、その重みで教会の床が畳三枚ほど

落下したとの椿事が生じたが、この折の下足番を担当したのが医専の学生たちであったという⁵⁹。こうした事情もあってか、長崎医専キリスト教青年会「浦山会」の事務所が組合教会内に設置されることになる⁶⁰。さらには、市立商業学校教師として同志社出身の西山教充の着任を機に、同志社校友会が結成され、教会の充実にも資するのである。大阪教会牧師宮川経輝来崎の折には、医専、高商のみでなく、西山の斡旋で市立商業においても演説会が開かれている⁶¹。

長崎馬町教会の統計によれば、1907、8年の兩年には当時としては異例といえるそれぞれ30名をこえる大量の受洗者を得ているが、これは組合教会が全国的規模で行った集中伝道の成果であろうと推察される。長崎においては、7年5月に10日間連続で、前記海老名弾正・前橋教会牧師堀貞一といった当代の名説教家による大伝道演説会が開催され、「長崎伝道界未曾有の盛況」を呈したという。会堂のみならず、医専・高商・市立商業でも演説会が開かれ、合せて同志社校友会も開かれた。この集中伝道の成果として求道者が60余名あり、その中23名が山本から受洗している。そして、この余波が翌年にまで及んでいるのである⁶²。

このような積極的な伝道活動は、1908年(明治41年)伝道会社による補助教会から独立した自給教会へと発展する結果を生み、同年9月28日百余名の出席者をえて独立完成式が挙行された。ついで、1910年には従来の借家ではなく伝道にふさわしい場所に会堂を求め、現在地に古い家屋を取得して会堂とした。明治末年の会員数は140名、平均礼拝出席者は40名である。

(iii) セブンスデー・アドベンチスト教会⁶³。

セブンスデー・アドベンチスト教会は、19世紀初頭アメリカにおいてキリスト再臨の教理と週の7日目(土曜日)を安息日することを強調して組織された教会である。日本では1896年(明治29年)東京で伝道を開始している。長崎とのかかわりは麴町で産婦人科医院を開業していた神代菊が、かつて東京で感化をうけた牧師国谷秀を長崎に招いたことにはじまる。1900年のことである。国谷は長崎に3ヶ月滞在して聖書講義を続けた。国谷は帰京後もしばしば長崎を訪れて神代のグループを指導したが、1906年(明治39年)長崎に定住してこの地における伝道を推進することになった。まず豊後町に講義所を設け、ついで馬町に移転して教会組織を行った。

ほどなく国谷は神戸に転じ、大阪で国谷と協力して伝道していた小林三郎が長崎伝道の任を受け9年に着任した。しかし、馬町の教会は「道路ニ接近シ車馬往来騒々シク演者ノ声聴者ノ耳ニ達シ難ク布教上不適當」との理由で桜町に移転している。翌年には国谷が再び長崎を訪れて天幕伝道集会を開き、教勢拡張に努めている。稲佐川上流において11名が受洗したと伝えられている。

日本で4番目に組織され、20名前後の教会員を擁する長崎教会であったが、土曜日を安息日とするこの派の主張は広く受け入れられることなく、また、これら信徒が次々と他所に移居

するなどの理由で、1923年（大正12年）に数名の信徒を残したまま教会廃止を決定し教職者を引揚げさせて今日に至っている。

(5) 各教派合同による伝道

長崎で伝道活動を行ったプロテスタント各教派教会は、それぞれ日曜礼拝その他で、あるいは独自の説教・演説会を開催して伝道に努めたのは当然であるとしても、各教派が協力し合っただけのキリスト教演説会をしばしば開いている。すでに聖公会の項でのべたように、1882年（明治15年）には聖公会と一致教会の合同演説会が榎津町芝居小屋で開催され、多くの聴衆を集めているが、この演説会が少なくとも記録に現れた長崎で最初の合同演説会である。

明治30年代に入ると、中央から著名な説教家・教会指導者を招いたり、在崎の教師・宣教師を説教者に、積極的にこうした合同のキリスト教演説会が頻繁に開催されている。『鎮西日報』『長崎日々新聞』といった地元紙、『福音新報』（日本基督教会）『基督教世界』（組合教会）『護教』（メソジスト教会）のごときキリスト教教派紙などに、合同キリスト教演説会の予告ないし報告記事を散見することができる。その一部を例として記してみよう。

1901年（明治34年）6月「基督教大演説会、長崎協同伝道にては今般キリスト教会各派連合し昨夜より明日まで3日間市内新大工町基督教会に於て基督教大演説会を開く由」（『鎮西日報』）、7月には「当市キリスト教会各派連合の大挙伝道第5回は昨日〔9日〕より来る13日迄毎夜8時より大村町聖三一教会に於て開く由」（同紙）、「15、16日両夜8時より舞鶴座にて、弁士は日本美以教会部長平岩愷保君神学博士オルーマンス君哲学博士ビリー君」（同紙）、翌年11月「今般長崎に於て来る17日より向3週間大挙伝道演説会を催す由、今其日取を記すれば17～19日は大村町聖三一教会にて、20～22日は麴屋町美以教会にて、其他は各教会の都合次第順次開催」（『東洋日之出新聞』）と報じている。

さらに次稿でのべる予定であるが、1906年（明治39年）5月袋町に長崎基督教青年会館（通称「袋町青年会館」）が竣工、この青年会館を活用しての演説会もしばしば開かれることになる。青年会館における合同の基督教演説会にはいつも200名をこす聴衆が集まったという（『福音新報』）。1909年の『鎮西日報』には「本年は我国に於る基督新教伝道開始第50年に相当するを以て本市各教会は連合して〔5月〕2日より7日まで袋町青年会館に於て演説会を開く」と記されている。また、1911年には「基督教各派及び青年会連合して昨〔3月〕3日より5日迄〔基督教連合大演説会を青年会館にて〕開く」とある（『長崎日々新聞』、『福音新報』にもこの記事がある）。

他方、上述の一般市民を対象とした大挙大演説会の効果に疑念をもち、むしろ教会内部の活動を盛んにし、信徒の信仰を警醒振起することが急務であると、長崎基督教信徒大会が大坂組合教会牧師宮川経輝の来援をえて、1903年（明治36年）3月に3日間出島美以美教会で開催されている（『基督教世界』）。又、この頃には毎年年頭に各教会を廻っての初週祈祷会が継続して開かれている（『福音新報』ほか）。興味ある催しとしては、当時全国的に各地で開

催されていた基督教信徒大運動会が、1897年(明治30年)長崎でも開かれた。「組合、美以美、神霊〔浸礼カ〕、監督4教会の催ほしにして明日〔4月24日〕田上合戦場に於て開会の筈」と(『鎮西日報』)。その他を列記すれば、各派連合の天長節祝賀会、紀元節祝賀会、時局を反映した「各教会連合して出征軍人の家族を訪問慰籍するため設立」された長崎基督教徒同情会の記事(『鎮西日報』明治37年2月27日付)などもみられる。

(付) ロシア正教会(ハリストス正教会)

明治期長崎にはカトリック教会・プロテスタント教会のいずれにも属さない、今ひとつのキリスト教会が存在した。ロシア正教会、今日のハリストス正教会である。たとえば、『長崎古写真集』^⑧には、屋上にロシア正教会のシンボルの玉葱型の黄金のクーポールをもつ聖堂の写真を見ることが出来る。当時の長崎市民は「ロシア寺」「森の教会」と呼んだという^⑨。

1862年(文久2年)来日したロシア正教会最初の宣教師ニコライ(Nikolai)は、宣教の中心を函館から東京に移し、積極的な伝道活動を開始した。かれは1878年(明治11年)の書簡によると、函館・大阪そして長崎にも宣教団の建物を建てる希望をもっていたが、資金不足のゆえに長崎では実現していない^⑩。外国人宣教師の数においては、正教会は他教派に比較して格段に少数であったとはいえ、日本人信徒を多く獲得しており、1880年には1万2千5百名、1898年(明治31年)には2万5千をこえており、カトリック教会に次ぐ信徒数を示している^⑪。

長崎における正教会の動きは、1882年(明治15年)大阪教会司祭高屋仲の管轄のもと、小島ルカが初めて長崎に派遣されたこと、ニコライ永眠時の1912年(明治45年)に49名の日本人信徒のいたことが伝えられているが^⑫、詳細は不明である。

他方、ロシア政府は1868年(明治元年)南山手に長崎領事館を開設、やがてこの領事館敷地内にロシア正教会聖堂が建てられることになる。明治中期ロシアが積極的に極東経営に活動を開始するに及んで、長崎に来住するロシア民間人が増加し、1889年には欧米人354名中40名のロシア人を数え、さらに1897年(明治30年)には31戸120名に上り、欧米人中第1位を占めるに至っている^⑬。これには次のような事情がある。ロシアが清国旅順を租借し軍港を設営、ウラジオストックの東洋艦隊の拡張を行ったことから、同艦隊所属艦船が長崎港に回航し冬期の避寒の地とするのを常とした。1897年に7隻のロシア軍艦が在港するなど、「長崎港はロシア東洋艦隊の根拠地」の如き観を呈したという^⑭。こうした事情から南山手のロシア領事館の広大な敷地に、ロシア海軍病院と医官官舎が設置され、さらに領事館付属教会として、海軍軍人・在留ロシア人のための聖堂が建立されたのである。したがって、この聖堂は日本人信徒を対象としたのではなかったといえよう。

『西海新聞』が報ずるところによれば、1887年(明治20年)6月23日付で「海軍礼拝堂立礎式」と題して、「露国海軍において当港大浦南山手なる同国領事館の北隣へ礼拝堂を建立するの計画を為したる趣は聞き及びしが、愈々地ならしも済みたるにつき去る18日同国海軍

中尉アレキサンドル・ミツェロック殿下には親臨して手づから礎石を据えられたり。此式には水師提督コロニロフ氏を始め数多の士官も臨場し中々盛会なりしよしなり」とある。工事も順調に進み、11月には「礼拝堂開式」の運びとなる。11月16日付同紙は「今度アレキサンドル・ミハロウィチ親王殿下来臨ありしを以て昨15日午前10時30分より開堂式を挙行せり。当時臨場の人々には同親王以下アリンダ及ナエジニックの両館〔艦カ〕長乗組の各将校等20有5名なりしが、日下長崎県知事、中村書記官にも陪式ありたり」と報じている^①。このロシア正教会にはロシア人司祭も常住しており、海星学校ではロシア人子弟の入学者が増加したためにロシア語の時間を設定し、このロシア人司祭を招いて授業の担当を依頼したという^②。

1904年（明治37年）日露戦争の勃発により、ロシア領事館と海軍病院は後事をフランス領事に託して閉鎖されるが、ロシア正教会は残留ロシア人のためにそのまま存続した。戦争終結後、長崎残留ロシア人の請願があり、ニコライはロシア語が堪能な日本人司祭高井万亀尾を長崎に赴任させた。かれは帰国を待って長崎に滞在のロシア兵捕虜、さらにはロシア革命を逃れて亡命してきた帝政派貴族・軍人・地主などのロシア人のための聖務を行った。「金のクーポル輝く美しい聖堂には参拝者で溢れ、ロシア語の公祈祷には全員ロシア語の聖歌を歌い盛大であった」という^③。この参拝者の中に数十名の日本人信徒もふくまれていたであろう。

その後のロシア正教会について簡単に記しておこう。1917年（大正6年）ソビエト革命政府が樹立されるにいたり、日本ハリストス正教会はロシアの母教会との関係を断絶、したがって長崎教会も東京の本部からの経済的補助をふくむ支援がなくなり、高井はかなりの困難を体験している。しかしながら、かれは長崎はもとより北九州、さらには朝鮮・満州などの正教会信徒のための司牧活動を続けた。1941年（昭和16年）第二次世界大戦に際して、南山手の聖堂の土地・建物は軍の命令で強制立退きとなり、やむなく浦上に近い西山の山林に換地を得て、ニコライ聖堂を建築して移転する。しかし、原爆により聖堂・司祭館ともに焼失し、高井司祭一家は長崎の地を去ることになった。ここに長崎におけるハリストス正教会の歴史は幕を閉じるのである。この時、長崎には2家族の正教会信徒があったのみであるという^④。

（未完）

註

- ① Otis Cary, A History of Christianity in Japan (Charles Tuttle, 1976) vol.2, p.409.
佐波亘『植村正久とその時代』（1937年、復刻版 1966年、教文館）、第1巻228頁以下
- ② イギリス教会宣教会については、ユージン・ストック編（吉田弘・柳田裕訳）『英国教会伝道協会の歴史』（聖公会出版、2003年）参照のこと。
- ③ CMS 宣教師がロンドンの本部に宛てた年次報告書・書簡の写しは、聖公会長崎聖三一教会が所蔵している。この貴重な資料の貸出を許可して下さった同教会中村正司祭（当時）に心から

感謝申上げたい。

- ④ ウィリアムス1861年6月11日付書簡(元田作之進『日本基督教の黎明—老監督ウィリアムス伝記』立教出版会、1970年、59頁。なお、本書は1914年刊『老監督ウィリアムス』の復刻版である)。
- ⑤ 元田作之進、前掲書71頁
- ⑥ 永田友諒他編『長崎聖公会略史』(同教会、1971年)、16、28頁以下
- ⑦ 菱谷武平『長崎外国人居留地研究』(九州大学出版会、1988年)、103頁以下、および永田友諒他編、前掲書152頁
- ⑧ リギンス、年月日不明書簡(元田作之進、前掲書)83-4頁
- ⑨ フルベッキ、1860年12月31日までの年報(高谷道男編訳『フルベッキ書簡集』新教出版社、1978年)42-3頁
- ⑩ フルベッキ、1861年12月31日までの年報(高谷道男編訳、前掲書)59頁
- ⑪ フルベッキ、1860年12月31日までの年報(高谷道男編訳、前掲書)43頁
- ⑫ 徳重浅吉『維新政治宗教史研究』(目黒書店、1935年)、336頁以下、また、南溪和上の『准水遺訣』には「通商ノ地ニ於テ祇教堂ヲ創建シ、許多ノ蛮教師カハルガハル来往シ彼法ヲ宣教ス。数百部ノ書ヲ渡シ海内ニ播布セシム。頃聞、長崎ニウィヤンスト云ウモノ来舶シ、博識ヲモテ鳴ル。此間、奇ヲ好ム者、之ニ従学スルコト蠅ノ牛糞ニ集ル如シ。殆ド永禄・天正ノ際ニ異ナラズ」とものべられている(『明治佛教全集』第8巻護教篇、春陽堂、1935年、117頁)。
- ⑬ たとえば、重久篤太郎『日本近世英学史』(教育図書、1941年)などをあげることができよう。
- ⑭ 重久篤太郎、前掲書、275頁以下の「ジョン・リギンスと幕末の英語研究」を参照のこと。
- ⑮ フルベッキ、1864年8月22日付書簡(高谷道男編訳、前掲書)93頁
- ⑯ 佐波亘、前掲書、304頁
- ⑰ フルベッキ、1865年6月5日付書簡(高谷道男編訳、前掲書)98頁
- ⑱ 松村菅和他訳『パリ外国宣教会年次報告』1、(聖母の騎士社、1996年)27頁
- ⑲ 杉井六郎『明治期キリスト教の研究』(同朋舎、1984年)140頁
- ⑳ 佐波亘、前掲書、491頁
- ㉑ 東野利夫『南蛮医アルメイダ』(柏書房、1993年)、海老沢有道『切支丹の社会活動及南蛮医学』(富山房、1944年)などを参照のこと。
- ㉒ 佐波亘、前掲書、284-285頁
- ㉓ 元田作之進、前掲書、88頁
- ㉔ 元田作之進、前掲書、88頁
- ㉕ 元田作之進、前掲書、88頁
- ㉖ 元田作之進、前掲書、64-65頁
- ㉗ フルベッキ『日本プロテスタント伝道史』(日本基督教会歴史編纂委員会、1984年)上、44頁
- ㉘ 元田作之進、前掲書、58-59頁
- ㉙ たとえば、フルベッキを中傷したためにかれを激怒させたと伝えられている『崎陽茶話並長崎邪教始末』(『明治文化全集』第22巻雑史編、日本評論社、1929年、7-10頁に復刻)の執筆者と目されている釈良巖または原口針水なども、かれと親しい接触をもった仏僧である(徳重浅

- 吉、前掲書、333頁以下、杉井六郎、前掲書、156頁以下)。
- ③⑩ Otis Cary, *ibid.*, vol.2, pp.57-60
- ③⑪ Otis Cary, *ibid.*, vol.2, pp.55f
- ③⑫ 永田友諒他編、前掲書、61頁以下
- ③⑬ 永田友諒他編、前掲書および『長崎聖公会略史・続編』(同教会、1981年)を主に参照。合せて、同教会所蔵のCMS宣教師報告書・書簡のコピー(註③)を参照した。
- ③⑭ 拙稿「明治期九州におけるプロテスタントの伝播と受容—CMS宣教師の記録を通してみた—」(『人間科学』第3号、1997年)49頁以下
- ③⑮ この模様を明治15年5月6日付『西海新聞』は次のように報じている。「一昨日榎津町に於ての耶蘇新教演説は傍聴無料の故を以て聴衆人殊に多く場中立錐の余地もなき程なりしが該宗教信仰者の少なき故にや本邦人の演者演台に出るや否や聴衆は口々に外国の尻舐り止める引込めの声のみなれば中途にて引込し人も多く唯だデニング氏其他外人の演説は現学説書より遠回りに説き出し且つ日本語も能く通じ居る事の珍しかりし故にや聴衆も静かに聴き居たる様子なりも主眼の宗教を説く時に至れば場中毎に轟々たりしは蓋し宗教の争いとでもいふ乎」と。この記事は当時の長崎市民のキリスト教に対する態度を如実に物語っており興味深い。なお、本稿において使用する長崎地元新聞記事は、すべて元長崎YMCA総主事松本汎人氏が克明に蒐集されたものである。快よく提供し使用をみとめて下さった松本氏に対して心からの感謝を申し上げます。
- ③⑯ 『日本聖公会九州教区史』(同教区、1980年)195頁
1887年(明治20年)当時日本伝道に従事していた3外国伝道団体—アメリカ聖公会内外伝道会(The Domestic and Foreign Missionary Society of Protestant Episcopal Church in USA)、イギリス福音伝播会(Society for the Propagation of the Gospel)およびイギリス教会宣教会(CMS)—の宣教師・日本人教職信徒代表が大坂聖三一神学校で合同協議会を開催、3団体の合同にもとづく「日本聖公会」が成立した(松平惟太郎『日本聖公会百年史』(日本聖公会教務院文書局、1959年、41頁以下。Otis Cary, *ibid.*, p.191)。
- ③⑰ 『日本聖公会九州教区史』47頁、松平惟太郎、前掲書125頁
- ③⑱ この新築校舎は現在の活水学院校地の一部で断崖の上であり、その真下の公道にはこの当時なお「キリシタン禁制」の高札が立っていたという(井川直衛編『東山五拾年史』、東山学院、1933年、68頁)。
- ③⑲ 日本基督教団長崎教会所蔵の「受洗人名簿」による。なお、西豊『長崎教会の草創期』上(キリスト教史談会、2003年)は、この受洗人名簿を整理・研究したものである。
- ④⑩ G. D. レーマン(峠口新訳)『ヘンリー・スタウトの生涯』(新教出版社、1986年)45頁
- ④⑪ レーマン、前掲書46頁、井川直衛、前掲書74頁
- ④⑫ レーマン、前掲書46頁
- ④⑬ 瀬川浅(述)「日本基督教団長崎教会略史」1925年
- ④⑭ フルベッキ、前掲書113頁、レーマン、前掲書47頁
- ④⑮ 瀬川浅(述)、前掲書
- ④⑯ 山本秀煌『日本基督教会史』(改革社、1929年、1973年)72頁

- ④7 レーマン、前掲書54頁
- ④8 日本基督教会柳川教会(編)『日本基督教会鎮西中会記録』(新教出版社、1980年)
- ④9 『福音新報』820号(明治44年3月6日付)
- ⑤0 『日本基督教団長崎銀屋町教会八十周年記念史』(同教会、1971年)および『長崎銀屋町教会百年史』第一部(同教会、1999年)を主に参照。
- ⑤1 『長崎銀屋町教会百年史』では、出島教会建設は1876年1月となっている(11頁)。
- ⑤2 『基督教世界』第1130号(明治42年3月4日付教会)
- ⑤3 日本バプテスト連盟歴史編纂委員会(編)『日本バプテスト連盟史』(同連盟、1959年)68-137頁、八十年記念誌委員会(編)『神の恵み八十年』(長崎バプテスト教会、1984年)および前田文生『健全なる教会成長のかぎを探る』(私版、2002年)第3章「長崎バプテスト教会100年の歩み」(113-119頁)を主に参照。
- ⑤4 80周年記念誌編集委員会(編)『日本基督教団長崎馬町教会八十年』(同教会、1982年)を主に参照。
- ⑤5 『基督教世界』第1118号(明治38年2月2日付)
- ⑤6 『福音新報』536号(明治38年10月5日付)
- ⑤7 『基督教世界』第1079号(明治37年5月5日付)
- ⑤8 同上、1238号(明治40年5月23日付)、『福音新報』627号(明治40年7月4日付)にも同様の記事をみることができる。
- ⑤9 梶山積『使命に燃えてー日本セブンスデー・アドベンチスト教会史』(福音社、1982年)38-39頁、57-58頁、108頁を参照。
- ⑥0 岡林隆敏他(編)『長崎古写真集ー居留地篇』(長崎市教育委員会、1995年)87、88頁
- ⑥1 『市政百年長崎年表』(長崎市、1989年)110頁
- ⑥2 ニコライ(中村健之介訳・編)『明治のハリストス教会』(教文館、1993年)111頁
- ⑥3 ニコライ、前掲書135頁、牛丸康夫『日本正教史』(日本ハリストス正教会、1978年)66頁
- ⑥4 『日本キリスト教歴史大事典』(教文館、1988年)981頁
- ⑥5 長崎市役所(編)『長崎市制50年史』前篇(長崎市、1939年)47頁
- ⑥6 長崎市役所(編)、前掲書251頁
- ⑥7 ロシア教会建立の年代に関してはいくつかの説がある。たとえば『長崎県大百科事典』には1905年(明治38年)とあり(713頁)、『市政百年長崎年表』では1883年(明治16年)となっている(110頁)。本稿では『西海新聞』の記事に依拠した。
- ⑥8 『海星百年史』(海星学園、1993年)44頁
- ⑥9 『首司祭アントニイ高井万亀尾神父略伝』(私家本)3頁。なお、8頁からなる小冊子の本書は、高井神父のご子息アントニイ高井幸雄氏から贈られたものである。高井氏は私の質問に丁寧に回答を寄せて下さり、また多くの資料を提供して下さいました。記して心からの感謝の意を表したい。
- ⑦0 前掲書、4頁

(2004年1月31日受理)